

たぬきの天井

星が降るような秋の夜のことでした。

太郎さんは、ペンキ塗りの仕事から帰ると、部屋の中で寝ころんでテレビを見ていました。

三十歳になって「いい加減に嫁さんをもらったら」といつも言われています。ペンキ屋の親方の娘さんの花子さんが好きなのですが、言い出す勇気がないのでした。

「たぶん、花子さんも、ぼくのこと嫌いではないのだが・・・」

そう思いながらも、口に出して行動に移せないのが太郎さんでした。

太郎さんは「ふーっ」と大きなため息を吐きました。その時です。

誰かが、アパートのドアをノックしました。

「ん？」

太郎さんは首を捻って、時計を見ました。

九時半です。

テレビは歌番組を続けています。

「こんな時間に、誰だろう？」

太郎さんはゆっくりと身を起こしました。

「あ・・・」

太郎さんはぼっかり口を開けたまま、開け放たれたドアの外を見ていました。

廊下にたぬきが一匹、きらきら光る瞳を向けて立っているのです。

テレビなんかで町中にたぬきが現れたと、騒いでいることがあります。けれど、たいてい近くに山があります。けれど、太郎さんの住むアパートは大都市の真ん中であって、近くには、山など影も形もないのでした。

「た、たぬき・・・」

太郎さんはちよっぴり恐くなりました。

どこからか逃げてきたのでしようが、人を噛むこともあると聞いていたからです。

でも目の前のたぬきは丸い目玉で、きよとんとして、太郎さんを見上げているだけです。

太郎さんは、可愛いらしいたぬきを、こわがった自分に苦笑いしました。

と、たぬきも笑ったのです。

太郎さんの背筋を冷たいものが流れました。

笑うのは動物の中で人間だけです。たぬきが笑ったなんて聞いたこともありません。

ごくり、と音をたてて唾を呑み込みました。

「な、なんだ・・・」

声が咽喉に引つかかかって出てきません。

「驚かないで下さい」

どこかで声がしました。

太郎さんは慌てて辺りを見回して、それから入り口の柱につかまりました。

心臓が頭のとっぺんで鳴っているようです。

声は目の前のたぬきが出しているのです。

もう完全に気絶しそうです。

「驚かないで下さい」

また、たぬきが話しました。

太郎さんは、大きく息を吸いました。

肺の中に冷たい空気が流れ込んで、ふつとうしかかった体を冷やしました。

太郎さんは柱につかまっただまま、目をぎゅつと閉じ、それからゆっくりと開けました。

でも、たぬきは消えません。

今度は、開いている右手で、ほほを思いっきりつねりました。

「いてて・・・」

するとたぬきが、話し出しました。

「夢ではありません。また私は化け物でもありません。落ち着いて私の話を聞いて下さい」

「あ、ああ・・・」

入り口で、太郎さんは腕を組みました。

「入れていただけますか？」

たぬきが言いました。

「あ、ど、どうぞ」

太郎さんはたぬきの人間らしさに感心して

しまいました。

あがりこんだためきが続けました。

「どうぞ、おかまいなく」

かえって、太郎さんが慌てます。

座布団を出し、お茶をいれました。

もし外から見ている人がいたら、テーブルをはさんで、たぬきと向かい合った姿は、なんと珍妙であったでしょう。

太郎さんはまだ少しぼんやりしていました。

言葉を話すためきなんて信じられないものが、夢でなく目の前にいるのです。

しかもよくよく見ると、両手の後に、何やら薄茶色の羽のようなものがあります。

太郎さんはまたごくりと咽喉を鳴らしました。

「さて、お休みのところもうしわけありません」たぬきが口を開きました。

「実は急なお願いがあつてまいったのです」

「はあ・・・」

「今から、ペンキ塗りをしていただきたいの  
です。といいまして、塗りかたの指導をお  
願いしたいのです。塗る者も、道具も用意し  
ております。明日の朝までにどうしても塗ら  
ねばなりません。素人ばかりで困っており  
ます」

「ど、動物園ですか？」

「いいえ、違います。引き受けていただくな  
ら、いまからご案内いたします。どうかお願  
いいたします」

ためきはそういつて深々と頭を下げました。

(まいったな・・・)

太郎さんは目をそらしました。

もう、夜も十時を過ぎています。ためきの  
頼みならばきつとお金ももらえないでしょう。  
そう考えてから、その思いを、ふっ、と、息  
とともに吐きだして、それから口を開きまし  
た。

「いいでしょう」

太郎さんは、人が困っていて頼まれると、いやと言えない性格なのです。ずいぶんとそのせいで損をしたこともありすが、相手が真剣ならばそれに応える自分の気持ちを大切にしたいのでした。

「ありがとうございます。では、そのまま結構です。私について来て下さい」

たぬきはすくつと立ち上がりました。

二本足で、すたすた歩きます。

たぬきについて、ドアに鍵をかけて、アパートの階段を降り、裏手に回った太郎さんは、そこで口をあぐりと開けました。

狭い路地にエスカレーターがあります。

青白く光っていますけれども、それは確かにエスカレーターです。そして、上を見上げて太郎さんは何度も目をしばたきました。

エスカレーターは地面から、アパートの二階を越え、近くのビルを越え、星の輝く夜空に突き刺さるように延びているのです。

「さあ、どうぞ」

「し、しかし、こ、これは・・・」

と、口ごもるまに、太郎さんは、エスカレーターに乗っていました。

エスカレーターは動き始めたようです。

いっこうに動いている感じはしないけれど、アパートの屋根が見え、ビルの屋上を通り過ぎ、町の灯が小さくなっています。

太郎さんはエスカレーターのですりをしっかりと掴みました。

風の音も、夜の冷たさも、何も感じません。エスカレーターは、ためきと太郎さんに乗せたまま、町の灯さえ天空の星々のように見える高みにまで昇り続け、知らぬ間に厚い雲の中に入り、やがて抜けてでました。

「どうぞ、着きました」

太郎さんは我にかえました。

足の下は白い雲です。エスカレーターは消えています。

空はくすんだ色です。

夜の町から、空の上の、昼の世界に来てい

ました。

「ここは、どこですか？」

太郎さんはたぬきに尋ねました。

「ここは、天国です」

たぬきは、にっと笑って言いました。

「じゃあ、ぼ、ぼくは死んだのですか？」

太郎さんは慌てました。

まだ、花子さんに好きだと言っていないのです。誰にもお別れを言っていないのです。

「いいえ、あなたはペンキ塗りの指導にきて頂いたのです」

「でも、ペンキなんて塗るところはどこにもないではありませんか」

「あそこです」

たぬきは空を指差しました。

太郎さんは空を見上げました。ぐるりと首が痛くなるほど見回しました。が、どこにもペンキ塗りの場所などありません。

「どこを塗るのですか、どこにもそんな場所はないではないですか」

「あそこです」

「どこです」

「つまり、空、です」

「空？」

太郎さんは目をぱちくりとしました。

「ここは天国です。」ためきは説明しました。

「宇宙の生き物の住む星々には、それぞれ一  
ずつ天国があつて、その星と特別な空間でつ  
ながっているのです。魂と空気と水のみは行  
き来できるのです。さて、明日、急にこの宇  
宙担当の神様が、地球天国に視察に見えられ  
ます。私はこの地球天国担当の大天使なので  
すが、今日一日で、天国の天井にあたる空が  
急に汚くなってしまったのです。天国の一日  
は地上の百年。慌てて下界をのぞいてみると、  
人間達がもくもくと有害ガスを出して空を汚  
しているのです。天国と下界は特別な通路で  
つながっていますから、汚れた空気があつと  
いう間に天国に押し寄せて、天国の青い空の

天井を、汚れた色に変えてしまったのです」

「あなたが、大天使・・・」

太郎さんは、たぬきを改めて見て咳きましました。

「それはですね」たぬき天使は言いました。

「人間の偏見です。虫には虫の、花には花の、たぬきにはたぬきの人生がちゃんとあるのです。つまり、人も動物も、植物も総て平等なのです。だから天使にかぶと虫がなっている天国もありますし、花の天使のいるところもあります」

太郎さんは顔を赤くしました。

「ペンキはどうやって塗るのですか」

たぬき天使はにこりとしました。

「ここの空は、たぬきの天井と言います。たぬきの小天使たちが、あなたの指示にしたがって、天国ペンキを天国ばけで塗ります。なにせ専門の方をお願いしないと塗りむらが出来てしまうのです。いままで、空が汚れることなどなかったので、ペンキ塗りの道具はあ

つても専門の方はいなかったので。では、さっそく」 たぬき天使はそう言うと、ぽんとお腹を叩きました。すると、雲の地平線近くに、数え切れないくらいの子だぬきが現れました。

みんな背中に小さな羽がついています。子だぬき天使は片手に小さな虹色のはけを持ち、もう一方の手にペンキ缶をぶら下げています。

「さあ、指示して下さい」

「でも、どうやって」

「心の中で考えるだけでいいのです」

太郎さんは、心の中でペンキ塗りをはじめました。

すると子だぬき天使達が、一斉に動き出しました。

虹色のはけが流れると、きらきらと輝く真っ青のペンキが空一面に広がっていきます。

いつの間にか太郎さんは雲の上で体を揺らしながら、手をあげ、ペンキ塗りの指示をはじめていました。

薄汚れた空が、たちまち透き通るような青空に変わっていきます。

太郎さんは首のいたくなるのも忘れてペンキ塗りの指示を続けました。

やがて、たぬきの天井と呼ばれる天国の空は真っ青に染まりました。

「ありがとうございます。これで神様も喜ばれると思います」

たぬき天使はぺこりと頭を下げました。

太郎さんもほっと息を吐きました。

子たぬき天使達は空を塗り終わると、煙のように消えてしまいました。

「大変、お世話になりました。これをお礼にお持ち下さい」

たぬき天使は菓子折りぐらいの紙の箱を差し出しました。

太郎さんが受け取ると、目の前の雲を突き破って、エスカレーターが現れました。

「どうぞ、お気をつけてお帰り下さい。本当にありがとうございます」

たぬき天使は、ぺこりと頭を下げました。

太郎さんは、箱を抱えてエスカレーターに  
乗りました。

ふつと意識が遠のきました。

眩しい光りに目をさますと、そこは太郎さ  
んのアパートの部屋の中で、太郎さんは布団  
にくるまっていました。

秋の陽射しが差し込んでいます。

「夢だったのか・・・」

太郎さんは起きあがりました。

すると、横にあつた箱が、かたりと音をた  
てました。「あ・・・」

太郎さんは自分のほほを叩いてから、箱に  
手を伸ばしました。

「たぬきの天使のくれた箱だ・・・」

ふたを開きかけて、たぬきの天使の言葉を  
思い出しました。

「天国の一日は、下界の百年です」

「それじゃあ、これは玉手箱・・・」

太郎さんは手をとめて、それからしばらく

考え、やがて、思い切って箱を開きました。

箱から煙は出ませんでした。そのかわり、目にもとまらぬ早さで、細い何か飛び出し、それは矢のようにアパートの外に消えていきました。

「なんだろう」

太郎さんは、立ち上がって、窓を開けました。見たこともない真っ青な秋の空が広がっています。

「たぬきの天井がきれいになったからかな」  
太郎さんはにこりとして空を見続けていました。

さて、箱から飛び出したものは何だったのでしょうか。それからしばらくして、太郎さんと花子さんが結ばれたところを見ると、それは、たぬきキューピットの矢だったのでしょうか。

おしまい